5 月 28 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　2：　1 – 11

「一つになって」

広島で開催されていた G7 サミット(先進 7 カ国首脳会議)が閉幕しました。

発表された首脳声明には、納得できるところも、不満が残るところもあったでしょう。それでも、「何とかして世界を平和へと変えていきたい」「地球環境の変化に、一つとなって取り組んでいきたい」との思いは伝わりました。そして、そのための努力が続けられているところも評価できるでしょう。

もっとも、安易に「一つになる」ことの弊害もあります。ローマや中国を初め、世界の歴史をひもとけば、一つの権力であるが故の腐敗がありました。小さな声が踏み潰されてきた歴史もありました。全体主義の嵐の中で、生きることさえ困難な時代もありました。

何よりも、神を神とも思わない所業さえ行うこともありました(「彼らは、『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』と言った。」創世記 11:4)。

だから神は、そのような人間たちの「今さえ良ければ」「自分さえ良ければ」を打ち砕かれます(「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。……直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」創世記 11:6-7)。

ここで注意しておかなければならないのは、神は「一つになる」ことそのものを戒められたのではないということです。「自分たちには力がある」と過信する人間を戒められました(「君侯に依り頼んではならない。人間には救う力はない。」詩編 146:3)。

人ではなく、神を中心とするように呼びかけられました(「いかに幸いなことか／ヤコブの神を助けと頼み／主なるその神を待ち望む人」詩編 146:5)。

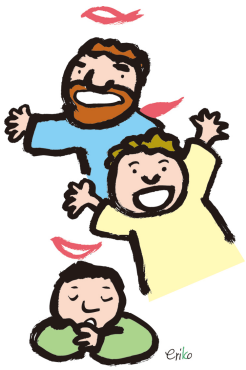
だから神は、今も「一つとなろうとする」人間たちを諦めることなく支え続けてくださいます。神に願い、神に求めようとする人間に応えてくださいます(「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」ルカによる福音書 11:10)。

弟子たちは「全ての者を弟子とする」(マタイによる福音書 28:19)ために、「一つになって」神に助けを求めました(「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、」使徒言行録 2:1)。

自分の力ではなく、自分の内側から働く神の力、聖霊を求めました。

そして、神はその思いに応えられます(「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」ルカによる福音書 11:13)。

けれども、それは安易に一つにするための力ではありません。それぞれ、一人ひとりは違ったままで一つになっています(「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」使徒言行録 2:4)。

様々な背景を持つ者たちが一つになって神を証ししています。

そのような人の集まり=教会が、これからも多様な人々を受け入れ、共に生きる「一つの群れ」であり続けられるように、祈り、働き続けて参りましょう。